

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

先行き不安

三股 金利

許せない。歳をとってきたらもつと寛大になると思っていたのに、やせ我慢の人生を美德とするその抑制がきかなくなってきたようだ。あちこちで引つかりを覚えてしまう。以前も書いたが電車の中の女性の振る舞い、グレードアップしている。ひととおり化粧を終えるとバッグを覗き込み、ラップにくるんだまん丸のおにぎりを取り出し、大きな口でかぶりつく。食べ残しを再びバッグの中に入れ、次は何をねらっているのか期待していたが何もなかったかのように静かに目を閉じた。許せない。お



じられない。男は化けるプロセスを見たくはない、化かされてお金を払うことが好きなのだ。

仕事の帰り。たまたまきれいなひとが右隣、心豊かに東京駅まで過ごせると思っていた。大手町を過ぎ次は東京のアナウンス。やおら左右の手を交互に上げ脇の下にスプレーをシュッシューとしたではないか。嘩然。その香りが鼻腔に届くや危うく理性を失うところだったの、ちよつと許せない。世の中どうなっているのだ。ス

紙関機
も現れたそう。それが器用に話したら車内で顔そりをする方

に、「いい年をして周りの空気が

読めないのか、小さな子供を居酒屋に連れてきて運動会をさせている若い夫婦に「子供には親を選べないんだ」、入れ墨をしているピアス男に「おまえはワールドクラスのサッカー選手か」、と注意をしてやりたいが、返り討ちにあって残り少ない人生を終わりにしたくない。晩酌もまだ続けたい。飲みながらニュースウェブとやらを何気なく見ていたらニュースの題材に對して一般人のコメントがテロップで流れる。中には公に向けての表現ではないものまである。言いたい放題の無責任。こんな日本に誰がした。きわめて許せない。(さすがに天下の放送局、最近では垂れ流しにはしなくなったような気がする)

前の職場の新任研修の時に理事長がこんな話をした。「私たちは」というが、そういう人を私は信じない。「私は」こう思っていると言いたい。主語が複数になると述語は暴走する、名前が伏せられても同様である。陰湿な攻撃性と憂さ晴らしが顕在化するのがネットの世界。

文句があるなら正体を現し、言いたいことを言えればいいではないか。若者は、将来の安定など求めず国会を包囲しろ、正々堂々と言つて撃沈されたほうが潔い、共感を覚える人が必ずいる。おやじはスポーツの観衆となつて健康的なヤジを飛ばせ。女性は内面の美を磨け。言つてやつたぜ。ちよつとスツキリ。しかし、批判的態度が増長すると、自分は正しいと錯覚し自らを見失う。「許す」「許さない」はいずれにしろ目線が高い。驕つてはいけない。今までの放言許してください。

でも自分が矢面にならないよう、匿名という安全な場所にいながら他に作用を及ぼす風潮に憂いを感じるのには私だけでしょうか。身の安全が求められる場合は別ですが、陰の人間がウヨウヨと蔓延するのはやはり空恐ろしい社会では。

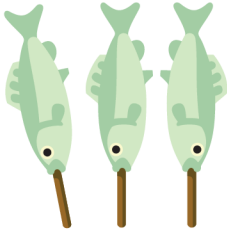


そんな憂いをよそに八月二十三日は地引網の日なのでした。

佑啓会では福利厚生事業でいろいろなことを企画していますが、地引網は初めてのこと。この季節は職員の家族共々楽しめる實立て遊びが恒例でしたが、今年は予約できずなんとか探し出した催しです。当初の予定日は台風で残念ながら中止。しかし、理事長の一声で復活し、各事業所から集まったのは総勢六十五人、そのうち子供たちは二十人。日ごろ妻と子供に「仕事、仕事」と言い訳しながら羽を伸ばしている輩は罪滅ぼしに、単に、酒のニオイに誘われた者など、参加した理由はそれぞれです。マイクロパスに分乗し目指した先は、「夕日が泣いている」あの思い出の九十九里浜なのです。思いだすなああの頃。今では肘から先と顔だけ日に焼け、地球に重力が有ることを体が物語っています。が、夏といえぱやはり海なのです。行く前から浮き輪に体を通して子供供たちを見ても、老いも若きも海に對する憧れは同じなのです。母親の胎内で羊水に浸かっていた頃の感覚がどこかにインプットされているのでしょうか。

トタン屋根の大きな海の家に到着すると網元のおばさんが元気

よく、高速の会話を連発します。通訳すると、キョウワ、アカエイガタイリヨウニハツセイシ、ウミニワハイラナイホウガイイヨ。ササレタラタイヘンダヨ。と言っています。子供たちには残念だけど安全第一、波との追いかけて遊びます。そのうち船が網を引き、両端を皆で引き始めます。絞られてくる網の中にはアジやカマスが大漁です。おまけにアカエイも大漁です。大きなスズキとサメが目を引きます。その中になんとイセエビが一匹、即座にメガホンを持った元氣印のおばさんが、「これはジャンケンだよー。こんな砂浜でイセエビがとれるのか。もしかするとおばさんはマジシャンかも。詮索は抜きにして、見ている楽しい、地でお客さんを楽しませている。見習わなければ。



お魚の観察会を終え、大きな屋根の下に戻り、食事会が始まります。学舎の厨房職員が、捕れたての魚を捌き、お刺身やお鮓、アジを叩いた「なめろう」(千葉の漁師料理)や「サンガ焼き」を振舞ってくれます。

パーベキュー料理を食べ、子供たちがスイカを割りつくすと、にわか保育士のおにさんが子供たちの人気者に。子供のいない女性職員も先輩職員のお子様を抱いて

「おかあさんといっしょ」の生放送よろしく隣の大広間は運動会会場の盛況です。いい光景です。自然と遊び、人と遊ぶ、笑い声があふれます。携帯電話をいじっている姿はありません。こうした時間の尊さを改めて感じました。

「いくつになつたのー」子供達の頭を撫でながら「よし扶養手当を上げよう」生ビールのせいですつかり好々爺になった理事長は子供たちの真ん中で写真に納まったのでした。

昨今一緒に酒を飲もうなんて誘えばバワハラだとか、個人情報だとか、なんだか人間関係を分断するような殺伐としたことが多すぎるようになりました。プライベートを強く意識している反面、公共の場にワタクシゴトを持ち込む場面が多く見受けられます。昔から人前での挨拶は「私事ですが」と控えめな表現になるのが常識です。他人を立てる意識が無くなつてしまつたのでしょうか。

一時的なマナー広告に「家でやろー」という表現がありました。人が迷惑する状態を絵にして、迷惑にならないところでやってくれと懇願する姿勢はなんだろう。どうして「こんなことはやめなさい」と言えないのだろう。不思議でなりませんでした。あたりさわりのない人との関係と相手は何を考えているのか無関心なところに人を相手にする仕事はできません。福祉の先行きを暗示していなければいいのです。

(大塚福祉作業所所長)

育ていただいた

十年、そしてこれから

勝 左千子

長男の千春は今年の三月に特別支援学校を卒業し、ふる里学舎和田浦にお世話になっていきます。小学部三年生のころから、アネッサで放課後や長期のお休みにずっとお世話になって参りました。今回、貴重な機会を頂きましたので今までのことを振り返りたいと思います。

千春は生まれたころから睡眠障害があり、抱っこした時に視線の合わない不思議な子供でした。発達全体の遅れがあって、三歳のときに袖ヶ浦福祉センターの治療教育室に伺いました。その時から長くお世話になったのが、いま松香園にいらつしやる牧野先生です。その後、精神発達遅滞と自閉傾向の診断がつき、養護学校の小学部に入學しました。



私たち両親は働いており、昼間は同居している私の母が千春と三学年下の弟の世話をしています。が、動きの激しくなる千春と弟の両方を世話することが難しくなりました。そこで、アネッサの児童デイにお世話になりました。測上

先生、宮崎先生はじめ多くの先生方にお世話になりました。千春の偏食はひどく、人の多いところは苦手のために食事やおやつを食べられないことが多く、御心配いただきました。本川先生、藺田先生が根気強く丁寧に御支援くださり、千春なりに皆さんと一緒に食事やおやつを頂けるようになりました。着替えもトイレも、アネッサでできるように育てていただきました。初めての場所での食事は今でも苦手な千春は、先日の一泊旅行でも鴨川グラウンドの夕食会場から走り出てしまいました。先生方の御支援で夕食と一緒に頂きました。

重い障害を持っていても本人も家族も安心して過ごすことができるのは、高い専門性に基づく理解と支援技術を持っていらつしやる先生方のおかげと感謝しております。十二年の学校生活の間には、登校するのが辛くなるような時期もありました。そんなときに千春に訊くと「学校行かない、アネッサ行く」というのです。アネッサの先生方にこのことを御相談したところ、不安定な状態の千春をケアしてくださいました。一度、私が思い詰めて「私が仕事をしているからいけないのでしょうか。」とこぼしたときに、「お母さんは働きなさい。私たちが千春君はみてあげるから。」とおっしゃって下さった測上先生のお言葉は一生忘れられません。

卒業後の進路について相談にのっていただき、高等部のときには市原で施設実習、お泊りの練習と、市原の先生方にも大変お世話になりました。御相談を重ねる中で、和田浦でお世話になれるとお話をいただいたときには、感謝の気持ちと安心感が胸がいっぱいになりました。卒業まで三ヶ月といった時期に

初めてうかがったにも関わらず、和田浦の先生方の御支援のおかげで千春は四月から和田浦で落ち着いて過ごさせて頂いております。あまりになじむのが早く、和田浦の先生方は魔法使いなのかと思うほどでした。後から思えば、長尾先生が「法人内で情報交換してもいいですか。」とおっしゃられたので「よろしくお願いします。」と回答したのですが、千春が成人施設で過ごせるように御支援いただいた成果なのではと思っています。改めて感謝申し上げます。



さて、この四ヶ月で百キロ以上あった千春の体重が、十キロ以上減りました。少し引き締まって、うんと姿勢がよくまりました。ほめるのと自慢げにしています。「作業ががんばってる?」と訊くと「はい」の合図をしてくれます。私達両親は、家族会のお仲間に入れて頂きました。先輩方のお話を伺うといういろと学ばせて頂けますし、孤立感がなくなります。本当にありがたいことです。

先日の家族会の活動で、私は草取りが下手だと気付きました。千春が作業でお仕事が上手になるのと、お母さんが家族会の先輩方と同じように活動できるようになるのと、どちらが先か競争です。このように幸せな競争ができるのは、今までの十年の間に親子ともどもアネッサで育てていただいたおかげ、そして卒業後に和田浦

でお世話になったからこそと心から感謝しております。どうぞ、今後ともよろしくお願いいたします。(和田浦短期入所 勝 千春さん 母)

地域交流会

三宅 孝平

未だ残暑を感じる日々が続きますが、今年の夏を振り返ると、和田浦では初めてとなるレスパイトの受入れなど、賑やかな夏を過ごしました。

今回は和田浦の行事、夏の地域交流会のお話しをしたいと思えます。和田浦では年に二回、地元平塚地区の皆様を施設にご招待し交流会を開いています。その内一回が夏に行われるグラウンドゴルフ大会と暑気払いの二部構成となっている夏の交流会です。もう一つは年明けに行われる、歌手を招待し、催しものを揃え、ゆったりとした時間を過ごして頂ける交流会となっています。

夏の交流会は和田浦職員だけでなく、各事業所から多数の職員が参加しています。今年の暑さは特にひどい。去年も同じ台詞を吐いていた覚えがあります。この陽気でグラウンドゴルフが出来るのかと心配になるくらいでした。そこはやはり平塚地区の皆様です。前日からのパツとしない天気を吹き飛ばし!暑さもホドホド!まさにグラウンドゴルフ日和となりました。なんとといったのも会場入ります平塚地区の皆様表情が違います。普段見ることのない、ギラギラと目

を光らせた、まさにスポーツマン!。触発されて我々職員の熱気も夏の暑さのようにヒートアップしてしまいました。

グラウンドゴルフといえば、昨年までは作業場の広い敷地を会場にしていました。まるで深いラフ・フェアウエーという感じ。しかし、今年は本建物横の芝生を会場として使用しました。そこはしっかりと刈りこめられた高速グリーン。まるで全米オープン並。(ちよつと言いつ過ぎか)それが吉と出たのか、職員を含めホールインワンが連発し、ハイスコアの激戦。結果は予想外?まさかまさかの職員が優勝してしまう事態に・・・来年はさらに激戦となること間違いなし。



グラウンドゴルフで汗をかいた後は、平塚地区の皆様も職員もお待ちかね、暑気払いが始まります。暑気払いでは、平塚地区の皆様のご自慢や職員の余興。そしてメインイベントは、グラウンドゴルフ大会の結果発表。賞も様々、景品もバリエーション豊かに・・・なんとといってもキッズ賞をもらった子ども達が景品を片手に楽しそうに外で遊んでいる姿はとてもほのぼのとする光景でした。交流会中はグラウンドゴルフの映像をスクリーンに映し出し、昼間の白熱した激戦の映像を見ながらの一杯となり平塚地区の皆様がとても喜んで頂きました。なんとといっても平塚地区の皆様はお酒の量が半端じゃないんです。毎年変わらぬに沢山

飲んでくれるのです。衰えを知らないとはまさにこの事。沢山飲んで、沢山食べて、カラオケで熱唱し、大いに盛り上がりつつ頂けると我々職員としてはこんなに嬉しい事はありません。



毎年盛り上がる暑気払いは、本当にあつという間で、気づくと平塚地区の皆様をお見送りしています。もつと話したかったな、と会の終わりはとても寂しい気持ちになります。今年も平塚地区の皆様は喜んで帰って頂きました。笑顔で手を振ってくれる、そんな姿を見られる事が一番嬉しいことなのかもしれません。そしてまた来年も良い交流会となるよう、頑張っていこうと思います。

(ふる里学舎和田浦 支援員)

編集後記

各所で猛暑を振るつた夏・・・しかし、帰省や旅行に花火等、楽しい思い出を沢山作ることができたと思います。佐啓のカレンダーを見ると、旅行にスポーツ等・・・秋も沢山の行事が待っています。その行事の成功を願いつつ、佐啓八十九号をお届けします。



高栗 博